

平成 24 年度国立大学図書館協会海外派遣事業参加報告書

金沢大学情報部情報企画課図書情報係
野田 晶子

このたび、平成 24 年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、アメリカのニューヨーク州とジョージア州の大学図書館を訪問し、調査研究を行った。
その結果について以下のとおり報告する。

1. 訪問期間

平成 24 年 10 月 16 日(火)～10 月 21 日(日)

2. 訪問先 / 担当者

- (1) University of Rochester / Ms. Katie Clark
- (2) Georgia Tech Library / Mr. Ameet Doshi

3. 調査研究内容

検索ツールや学術情報資料の電子化が進む現在、新たに発生する利用者ニーズをどのように調査・把握し、応えているか、及び専任職員の必要性についてインタビューを行った。併せて、調査の結果建設されたラーニング・コモنزの見学を行った。

4. 調査研究の成果

今回訪問した 2 大学とも、利用者のニーズを把握するために、長年にわたり継続的に動向調査を行っていることが分かった。また、動向調査は最初から決まったフォーマットがあったのではなく、アンケート用紙を用いての調査、インタビュー調査、定点観測、フェイスブックやツイッターを使った調査、絵を描いてもらったり写真を撮ってもらって行う調査など、色々と試行錯誤を繰り返しており、現在も継続中であった。この調査の結果、2 大学とも図書館内のラーニング・コモنزの改装あるいは増設を行ったが、2 大学とも改築計画はこれで完成ではなく、今後とも更に拡大する予定である、とのことであった。

訪問前までは、電子化によって図書館の需要は減るのではと考えていた。しかし今回 2 大学を訪問して、ロチェスター大学、ジョージア工科大学ともに既存のサービスの需要が減った場合はそのサービスに代わる新しい別の専門的サービスの提供を始めればよく、図書館と専任職員の需要が減ることはないと考えていること、2 大学が行っていた利用者調査は、利用者が本当に求めている学習環境や電子コンテンツといった、現在必要なサービスを把握するために行われていること、などがわかった。また、以上のような調査を実施するには、継続的に調査・分析を行うことができる専任職員の存在が不可欠であると感じた。

今回 2 大学を訪問して、日本でも日本の利用者ニーズに合わせた新しいサービスを考える必要があり、その為には長期の調査を行うことができる専任職員と、一貫したサービスを提供できる場所が必要であると考えた。今回の訪問で得たものをこれからの業務に生かして行きたい。